

2024年民主党「予備選」と第三の党

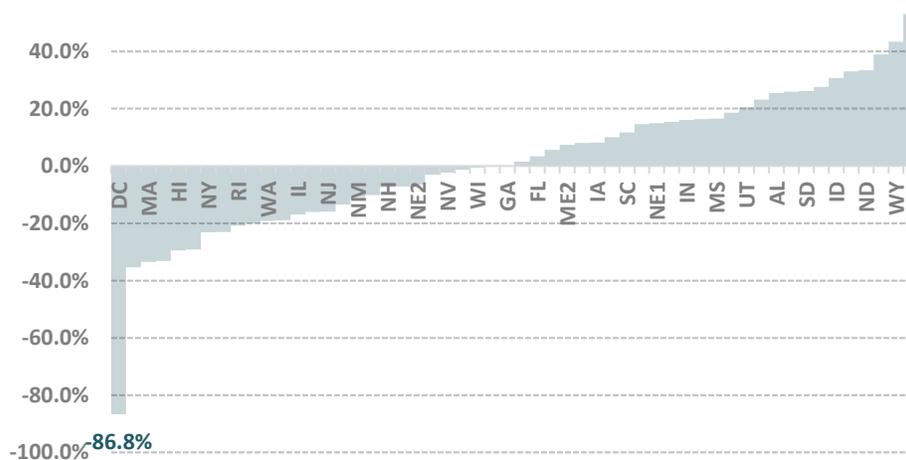
I. 「バイデンは絶対に二期大統領だ。」

見渡す限り民主党

現職大統領が再選を目指し、2020年予備選のライバル達が現職支持に回り、他候補も目立たない中、ワシントン DC(以下 DC)で民主党予備選を話題にする者は多くない。一方、大統領支持率は低調のまま。そのバランスが成立する実態に焦点を当てる。先ず、DCでのバイデン支持の盤石さから確認する。

図1は20年大統領選挙での両候補得票率差(トランプ - バイデン)を示す。マイナスの大きさがバイデンの勝利幅だが、DCは突出している。ネット86.8%なので、DCで投票した者の93%超がバイデン支持者だったことになる。

図1: 2020年の大統領選ネット得票率[トランプ - バイデン]



(出所: 連邦選挙委員会)

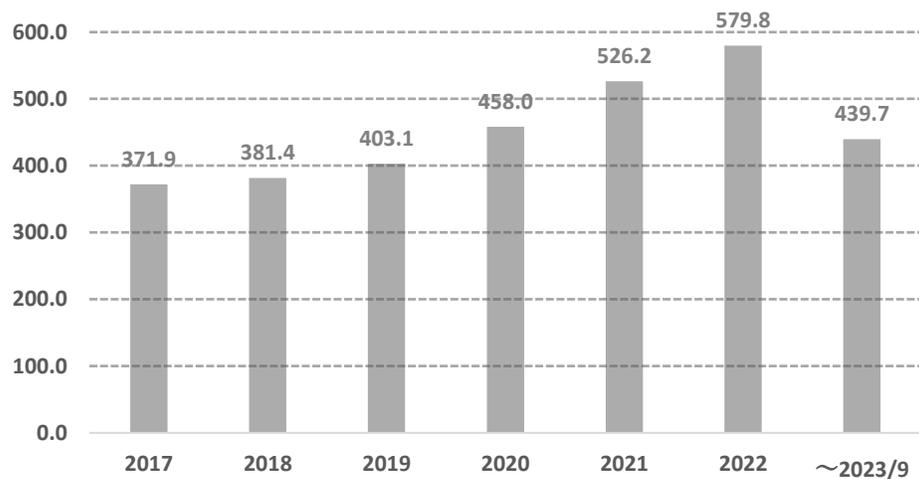
バイデン政権と Align する DC 基盤

こうした支持率との因果関係は不明だが、民主党は2020年選挙の後にDC限定の資金供与を行っている。2021年3月のアメリカ救済計画法(総額1.9兆ドル)の地方助成金の中で、DCのみ、7億5千5百万ドルの上乗せをしたのだ。これは、1年前トランプ政権下、別の地方助成金給付時に、DCを領土扱い

(州ではなく)したことで目減りした分の埋め合わせだった。DC から見れば、取りはぐれ部分の回収であろうが、財務省作成の配布表の中に、DC の為だけの「CRF Top-Up¹」という項目が追加されているのは示唆深かった。

連邦政府から州政府への助成金と比較するのは妥当ではないが、2020年の政権交代はDC ビジネスにも貢献している。図2は上位20位ロビー会社の収入の推移²である。20年は選挙年の要素を勘案すべきと思われるが、何れにせよ上昇基調にある。これは現政権に限らず常ではあるのかもしれないが、バイデン大統領の元補佐役や、政権の親族が「濡れ手に粟」(raked in the dough)という指摘³。インフレ削減法・半導体科学法の連邦規則に関連したビジネス機会増で記録的収益になっているという声⁴もある。数字は掴み難いが、DC のシンクタンクから現政権に入る者の数も増えた印象だ。

図2: Top 20 ロビー会社収益 [百万ドル]



(出所: Open Secret)

本章のタイトルに戻ろう。そういう DC の中で、バイデン大統領が立候補を決めた19年以降、DC の人間と話せば必ず出てくるフレーズが「バイデンは絶対に二期大統領だ」である。従い、「バイデン本人の判断で一期勇退」という報道⁵は奇異に感じてきた。バイデンと直接接点のあった人間は「政治家は将来があるから頑張れる。バイデンはその典型。ジミー・カーターも存命。医療技術の進歩は過去の常識を変えている。」と言う。他の知人も「(バイデンの言い間違いや転倒等に関する)報道は歪曲されている。彼は引続きシャープだ。」と強調す

る。真実の検証は不可能だが、DCの専門家は説得力のある話し方をする。

II. 過去の一期大統領 - 予備選で敗退した者は六名

本稿がハイライトするのは現職大統領が属する党の予備選である。よりのを絞れば、現職大統領の自党予備選に於ける進退、ということになる。その整理に当たって、先ずは先例を探る。

過去、現職を除く大統領の人数は 44 名⁶。内、2期8年を務めた者が14名⁷。残り30名の内、再選を果たし、2期目任期半ばで退任⁸、暗殺⁹された者が3名。これら17名が選挙で2回当選を果たした者。残る 27 名が当選1回のみの大統領である。

この内、法律の定めで再選に排除された者¹⁰と第1期目中に病死したり暗殺された者、即ち構造的に2期目がなかった者が6名。更に初期から1期勇退を決めていた者が5名。これら11名を除いた 16 名が、2期目再選を目指しながら叶わなかった者。この中で、自党内予備選勝利・本選敗退した者が10名。残った 6 名が、再選意志に関わらず予備選段階で消えた大統領となる。従い、今回考察の対象となるのはこの6名となる。

就任期間	人数
2期8年	14
当選2回、2期目半ばで退任・暗殺	3
法律に拠り2期目立候補不可・1期目で病死・暗殺	6
1期目で自主的に再選目指さず	5
自党予備選で勝利・選出されるも、本選で敗退	10
自党予備選途中で断念・選挙敗退	6

6名の内5名が1841年～1881年の40年間に就任した大統領であり、残る1名が第36代大統領のリンドン・ジョンソンである。先ず、19世紀、南北戦争前後の大統領5名の、予備選から出馬断念までの経緯を簡単にまとめる。

ジョン・タイラー 第10代（ホイッグ党） April 4, 1841 – March 4, 1845		前大統領ウィリアム・ヘンリー・ハリソンの死を受けて就任。大統領就任後、元々の所属党だったホイッグ党から除名。新党結成して予備選に臨むも副大統領候補も選べず。途中で撤退。
ミラード・フィルモア 第13代（ホイッグ党） July 9, 1850 – March 4, 1853		前大統領ザッカリー・テイラーの死を受けて就任。逃亡奴隷法の支持で人気凋落。国務長官のダニエル・ウェブスターへの配慮で出馬辞退を検討。結局党大会ではウィンフィールド・スコットが選出される。
フランクリン・ピアース 第14代（民主党） March 4, 1853 – March 4, 1857		カンザス・ネブラスカ法を支持したことへの反発始め、政権が不人気であり、本選での勝利も覚束ない中で、党大会で落選。
アンドリュー・ジョンソン 第17代（民主党） April 15, 1865 – March 4, 1869		党大会での選出を目指す、一回目投票で元オハイオ下院議員のジョージ・ベンドルトンの後塵を拝す。頼みの南部の支持が剥がれ、最後は元ニューヨーク知事のホレイショ・セイモアが選出。
チェスター・アーサー 第21代（共和党） September 19, 1881 – March 4, 1885		前大統領ジェームズ・ガーフィールドの死を受けて就任。党大会以前に党内では下院議長・国務長官経験のジェームズ・ブラインが優勢。自身の実績を守るために辞退せず。党大会でブラインが候補に選出。

各大統領の予備選敗退要因を見ると、タイラーは、自党との確執も厭わず、行使した拒否権を議会に覆される等、骨太な方針が影響した。フィルモア、ピアースは奴隷制に係る政策で人気を失い、ジョンソンは南北戦争後の復興で共和党と衝突し、弾劾訴追を受けた経緯があった。アーサーの敗退は、1880年選挙で党内の二派閥¹²候補選出が関係している。大統領候補：ガーフィールド（Half-Breed 派）、副大統領候補：アーサー（Stalwart 派）で大統領選勝利したものの、ガーフィールドが暗殺。対立派閥であった Half-Breed の推すブラインに敗れた。

次に、公民権法成立、「偉大な社会」政策で貧困対策や人種不公正是正に貢献したリンドン・ジョンソン大統領の例を見る。

リンドン・ジョンソン 第36代（民主党） November 22, 1963 – January 20, 1969		前大統領ジョン・ケネディの死を受けて就任。64年選挙で当選。68年選挙 ¹³ の民主党予備選では、現職ジョンソンの存在で、当初他候補が存在せず。途中、ミネソタ上院議員のユージン・マッカーシーが立候補。ニューハンプシャー州予備選でジョンソン： 49% 、マッカーシー： 42% 。マッカーシー善戦を見たロバート・ケネディ Sr. が4日後に参戦。2週間後にジョンソンが撤退。
--	---	---

ジョンソンの不人気の原因はベトナム戦争であった。また、彼が撤退を判断したもう一つの原因は彼の健康問題にあり、3期目の終わりまでの自らの存命に疑問を持っていたことがある。

言うまでもなく、68年当時の反ベトナム戦争のダイナミクスは今のアメリカには存在しない。当時を知る人間と話しても、1968年と2024年の比較は一笑に付される。一方、バイデン大統領の支持率は図3の通り、直近10人の大統領の中ではジミー・カーターに次ぐ低さ。(ジョンソンは46.9%)

加えてバイデン大統領は図4の通り、2020年のニューハンプシャー州予備選で5位に甘んじている。

図3 : Compare with past presidents@1,044days

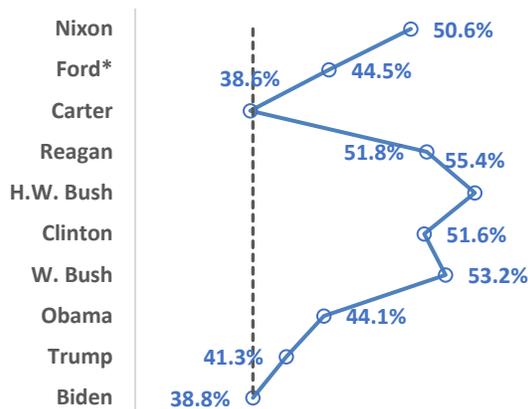
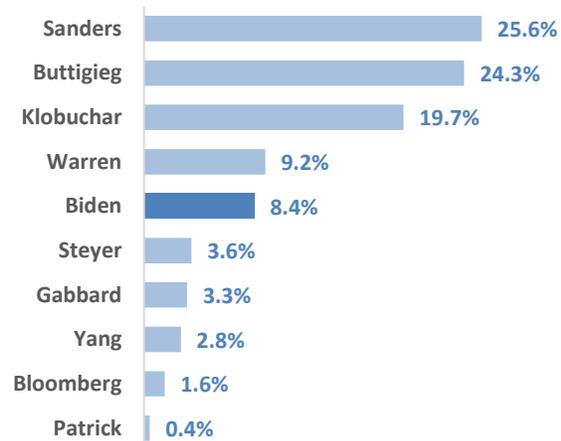


図4 : 2020 New Hampshire Primary %



では、来年再び、ニューハンプシャー州でドラマが起きる可能性があるのか。それに就いて考えてみる。

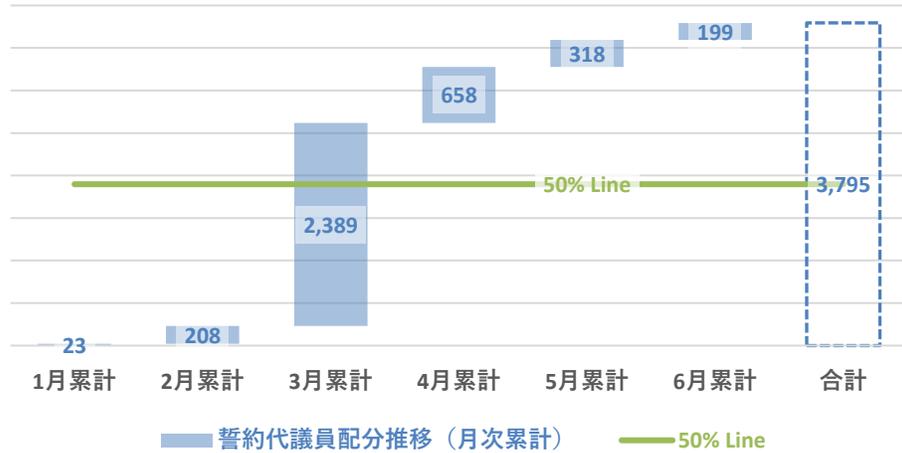
III. 民主党予備選スケジュールと候補者。更に第三の党や無所属の動き。

民主党予備選 2024 のおさらい

本稿のテーマである民主党予備選に就いては 2020 年のワシントン報告「米国大統領選：民主党指名争い」¹⁴（執筆：上原所員）に詳しい。ここでは、簡単に 2024 年の民主党予備選の票（正確には誓約代議員数）の累積スケジュールを図 5 に示す。誓約代議員総数は 3,795 名となる。現時点では、所謂スーパ

ー・チューズデー（2024年は3月5日: 1,420名が対象）を含む3月で2,389名が決まる。次章以降でも触れるが、1月の23名はニューハンプシャー州（1月は同州のみ）であり、誓約代議員総数から見れば、僅かであることが判る。

2024年民主党予備選・誓約代議員月次累計



(出所: The Green Paper)

民主党対抗馬 –
Outsider と Long-shot

冒頭で書いた通り、現職大統領の出馬・今のところ注目に値する対抗馬も不在、であり、甚だ話題にならない「予備選」ではあるのだが、現状の（大統領以外の）有力候補を下のテーブルに示す。各候補の詳細は遍く出回っており、その解説は本稿の趣旨ではなく、ここでは簡単な職歴・党派等を記すに留める。

<p>マリアン・ウィリアムソン (民主党) 71歳</p>		<p>著述家。講演家。スピリチュアルリーダー（牧師）。広く慈善活動を行う。2014年にカリフォルニア33区から連邦下院議員に立候補するも落選。2020年大統領選に出馬。予備選敗退後はサンダース支持。政治信条：中絶推進・黒人（解放奴隷）へのReparation・銃規制・国民皆保険等。</p>
<p>ディーン・フィリップス (民主党) 54歳</p>		<p>実業家。政治家。2019年よりミネソタ3区選出の下院議員。家族保有のDistiller（蒸留業；ウィスキー・ジンウォッカ等）会社のCEOと同時に、その他の食品会社を保有・経営。個人資産77百万ドル（2018年）。リベラル¹⁵・ビジネス¹⁶重視。</p>

ウィリアムソンは上の通りで下院選・大統領選への出馬歴はあるが、実際に政治家を務めたことはなく、Outsiderである。2020年大統領選に出馬し、予備選が始まる前の1月10日に撤

未参戦だが、より現実的な「候補」

退。但し、一般投票数（Popular Vote）で言えば 22,334 であり、予備選前撤退の候補の中では 3 位である。（カマラ・ハリス候補（当時）は 844。）フィリップスは現役下院議員であるが、今回の出馬表明は 10 月 26 日。主要メディアからは Longshot（可能性の低い・現実味の薄い）と形容される¹⁷。

上の二名と異なり立候補はしていないが、事実上の有力「候補」と目されるのは、ミシガン州知事のグレッチェン・ウィトマー、カリフォルニア州知事のギャビン・ニューサム、イリノイ州知事の J.B. ブリッカー。だが、彼らはバイデンが予備選に残る限りは参入の意思は無さそうだ。

民主党予備選からは外れるが、次期選挙への不出馬を決めた、ウェスト・バージニアのジョー・マンチン上院議員（民主）は、大統領選への検討有無を尋ねられて、「勿論だ」と回答¹⁸。スーパー・チューズデーの 3 月 5 日前後までに判断するとしている。

このマンチン議員の動きで注目を集めているのが No Labels¹⁹ という政治団体である。同組織は、設立 2010 年と新しく、中道・超党派（彼らは「常識を持った多数（Commonsense Majority）」を標榜）を支持するとしており、2024 年選挙では、民主・共和何れでもない第三の党の候補を支援することを目論む²⁰。彼らのリーダーシップには、長きに亘りコネチカット州上院議員を務め、2000 年大統領選の副大統領候補だったジョー・リーバーマン、元メリーランド州知事のラリー・ホーガンが含まれる。今年 7 月には目標とする 70 百万ドルの資金調達間近と発言²¹。これを以て、全米 50 州の Ballot Access（候補者掲載権）取得を目指している。（直近で 12 州²²の Ballot Access を取得済。年末までに 27 州、春までに 34 州を目標とのこと²³。）彼らが潜在的な候補として名前を挙げるのが、前出のマンチン、ホーガン、元ユタ州知事でロシア・中国・シンガポールの大使を歴任したジョン・ハンツマンだ。こうした動きに対して、民主党前下院議長のナンシー・ペロシ議員は 11 月初旬「No Labels は我々の民主主義にとって脅威だ」と発言²⁴している。但し、彼らが「超党派」を標榜することから判る通り、票を奪われるのは民主党には限らず、共和党からも警戒する声が出ている。

参考までに。第三者・無所属候補

こちらでも民主党予備選とは無関係だが、政治信条が民主党のそれと重複し、本選で影響を及ぼす可能性のある無所属候補を挙げる。（無所属なので、共和党の票が流れることも想定される。特にケネディ候補の非介入主義部分等。）下の2名は何れも話題に上るが、実際の政治家としての経験はない。何れも、民主・共和両党の票を侵食することはあり得るが、彼らが本選で当選するというシナリオは余り現実的でない。

ロバート・ケネディ Jr. (無所属) 69歳		環境法弁護士。活動家。広く環境保護活動（訴訟・ロビー・PR・アクティビズム）での実績。コロナ・ワクチン接種と自閉症の関連を主張（陰謀論信者）。再生可能エネルギー推進・化石燃料（原発）反対・マイノリティ保護・非介入（外交）・中絶推進 ²⁵ 。当初民主党から出馬⇒無所属に。
コーネル・ウェスト (無所属) 70歳		哲学者。神学者。政治活動家。社会批評家。ハーバード・イエール・プリンストン等の大学で教授職。非マルクス主義の社会主義者を自称。バーニー・サンダース上院議員の主張に賛同。2020年は彼を支持。当初、民主党から、後に緑の党からの出馬を目指すも、無所属に。

ニューハンプシャー州予備選

本節の最初で書いたが、ニューハンプシャーの誓約代議員数は23に過ぎない。但し、最初の予備選で、その結果は注目を浴びる。1968年、同州でのマッカーシー上院議員の躍進がロバート・F・ケネディ Sr.の参戦を呼び、リンドン・ジョンソン大統領の撤退に繋がった。更に前章の図4の通りで、バイデン大統領は2020年、ここで大苦戦を強いられている。

これを受けて、バイデン大統領は昨年12月、民主党全国委員会宛に、「予備選の民主党候補を選出するにあたり、有色人種の有権者の声が、今よりもずっと早いタイミングで届くようにせねばならない。」という趣旨を含む手紙²⁶を出した。州名は記載無いが、平たく言えば、アイオワ・ニューハンプシャーではなくサウスカロライナ（バイデン大統領の支持層である黒人が多い。）を予備選の最初にすべき、ということである。これを受けた民主党全国委員会は、サウスカロライナを2024年2月3日、ネヴァダとニューハンプシャーを2月6日とする予備選スケジュール改正を行った。だが、肝心のニューハンプシャー州法は合衆国の中で最初の大統領予備選を行うことを義務付けている。民主党全国委員会はその改正を同州に指図したが、共和党が多数を占める同州がそれを受諾することはなく、民主

党の同州予備選は1月23日となった。民主党全国委員会は指示に背いた同州民主党や同州で選挙活動を行う候補に対して罰則や制裁を課す権利があるが、行使するかどうかは不透明だ。バイデン大統領は、ニューハンプシャー州予備選には不参加だが、同州のバイデン支持者が Write-in（投票用紙に名前がないが、空欄に名前を追加して投票する形式）のキャンペーンを始めている。

IV. まとめ

バイデン大統領自身の意向

前章までで、本稿が触れていない部分がある。それはバイデン大統領が今の判断を変えず予備選を戦うかどうか、という点だ。本稿執筆時点と言えば、それは確実の様に見える。大統領は二期貫徹を公言している。同時に直近の民主党予備選候補の支持率を見れば、バイデン大統領が67%と、二位のウィリアムソン（7.4%）、フィリップス（4.2%）を大きく突き放しており、これを見れば、このタイミングで勇退というのは非現実的と言えよう。

可能性があるとするれば、大統領の健康問題が顕在化すること等かもしれないが、現職大統領の健康問題に就いて正確に把握したり予測したりする・出来る人間は極端に限られるだろう。当地でその話をすれば、これも前出の通りだが、大統領が如何に大丈夫か、加齢の問題は何年も前から指摘されているが全く顕在化しておらず如何に根拠がないか、等々の話を聴けるはずだ。一方、大統領の言い間違いや転倒の映像だけを抽出してコラージュしたものも存在するが、それは共和党の選挙キャンペーンの一環と看做されるべきものだろう。何れも予測の根拠としては妥当でなく、健康問題を持ち出して大統領の出处進退を読もうとするのは、余り建設的に思えない。

現時点では、当然の如く、現職のバイデン大統領が民主党予備選の実質唯一の候補。岩盤支持層を持つ DC での勢いも衰えておらず、予備選への不安を耳にすることは殆どない。一方、就任二年以内に、国内投資・雇用創出を誘引する大型法案を次々と成立に導き、強い消費と低失業率を実現しながら、大統領としての評価は高くない。Long-shot や Outsider であっても、自党から対抗候補が出て来る。圧倒的優位に関わらず、ニューハ

ンプシャーと言う小さな州を無視できない。そして歴史を遡れば、無視できない理由がない訳でもない。

バイデン大統領やその周辺、キャンペーン陣営は今までの政策に自信を持ち、課題はメッセージングだけと思っているので、予備選を撤退する心算はないだろう。何よりも、2020年選挙での「トランプを倒した≒倒せる候補」という実績。従い、共和党側でトランプ前大統領が優勢である限り、バイデン大統領の、候補としての価値は維持される。従い、バイデン陣営の課題は、何としてもトランプ前大統領を共和党候補に選出させることだろう。一方のトランプ陣営も、今のバイデン大統領の（大統領としての）人気の低さや、大統領が高齢である点は魅力だろう。従い、バイデン・トランプ陣営ともに、相手の党の候補はトランプ・バイデンであって欲しい筈だ。俗な話であるが、ニッキー・ヘイリーが共和党の大統領候補になったら。そして彼女がバイデン大統領とディベートする姿を想像してみたい。そのシナリオを一番避けたいのは、バイデン大統領でありトランプ前大統領ではないだろうか。奇妙な相互依存関係と言っても良いだろう。

その中で、予備選の影に控える無所属・第三の党の存在。No Labels は、民主・共和共に不人気で国民の声を代表し得ない候補であることに対して、第三の党、即ち、Alternative を選ぶ機会を国民に与えるところに意義を見出す。そうすると、バイデン・トランプが、相互に共通する利益（=バイデンにとっては共和党候補トランプが最適解で、逆もまた真なり。）を追求する限り、No Labels が何れかの候補と組む可能性が上がる。そして、その候補は、RFK Jr, やコーネル・ウェストやマリアン・ウィリアムソンの様に政治家未経験ではない。ディーン・フィリップスよりも実績がありそうだ。その様に眺めてみると、今のところは盛り上がり欠ける民主党予備選だが、今後の動きは注目に値しよう。

以上/峰尾

本資料は公開情報に基づいて作成されていますが、丸紅米国会社ワシントン事務所（以下、当事務所）はその正確性、相当性、完全性を保証するものではありません。

本資料に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するもので、当事務所は何らの責任を負うものではありません。

本資料に掲載している内容は予告なしに変更することがあります。

本資料に掲載している個々の文章、写真、イラストなど(以下「情報」といいます)は、当事務所の著作物であり、日本の著作権法及びベルヌ条約などの国際条約により、著作権の保護を受けています。個人の私的使用および引用など、著作権法により認められている場合を除き、本資料に掲載している情報を、著作権者に無断で、複製、頒布、改変、翻訳、翻案、公衆送信、送信可能化などすることは著作権法違反となります。

- 1 Coronavirus Relief Fund
- 2 “Top Lobbying Firms”, Open Secrets, (as of) October 24th, 2023. <https://www.opensecrets.org/federal-lobbying/top-lobbying-firms?cycle=2023>
- 3 “Biden-tied lobbying firms raked in the dough during his first year”, Caitlin Oprysko, Policico, January 21st, 2022. <https://www.politico.com/news/2022/01/21/its-a-gold-rush-for-lobbying-firms-with-biden-ties-527635>
- 4 “Lobbying firms start strong after record \$4-billion haul in 2022”, Karl Evers-Hillstrom, The Hills, April 20th, 2023.
- 5 “Biden signals to aides that he would serve only a single term”, Ryan Lizza, Politico, December 11th, 2019. <https://www.politico.com/news/2019/12/11/biden-single-term-082129>
- 6 バイデンが46代目であり45代であるが、グローバー・クリーヴランドが22代目と24代目を務めたため、人数は44名となる。
- 7 14名の内、フランクリン・ルーズベルトは「第二次世界大戦に巻き込まれない為」「第二次大戦を完遂する為」と称して4期（4期目の2ヵ月と23日目で死亡）務めた。ジョージ・ワシントンは手続き上の遅れで就任が予定より1ヵ月と26日遅延した為、その分8年より短い在任期間となった。
- 8 リチャード・ニクソン（37代）
- 9 ウィリアム・マッキンリー（25代）、エイブラハム・リンカン（16代）
- 10 ハリー・トゥルーマン（33代）4期目半ばで死亡したフランクリン・ルーズベルトの後を受けて、1期目は選挙無しで3年9ヵ月。2期目は選挙で当選して就任。だが、1951年成立の憲法修正22条「何人も、2回を超えて大統領の職に選出されてはならない。他の者が大統領として選出された場合、その任期内に2年以上にわたって大統領の職にあった者または大統領の職務を行った者は、何人であれ1回を超えて大統領の職に選任されてはならない。」に該当（第一期目が3年9ヵ月だった為）し、次の選挙には出馬できなかった。
- 11 本稿で使用した写真は全て MS Word の Insert - Online Pictures より取得、以下を本文写真と併記することとする。
ジョン・タイラー：[This Photo](#) by Unknown Author is licensed under [CC BY-SA](#)
ミラード・フィルモア：[This Photo](#) by Unknown Author is licensed under [CC BY-NC-ND](#)
フランクリン・ピアース：[This Photo](#) by Unknown Author is licensed under [CC BY-SA](#)
アンドリュー・ジョンソン：[This Photo](#) by Unknown Author is licensed under [CC BY-SA](#)
チェスター・アーサー：[This Photo](#) by Unknown Author is licensed under [CC BY-SA-NC](#)
リンドン・ジョンソン：[This Photo](#) by Unknown Author is licensed under [CC BY-SA](#)
マリアン・ウィリアムソン：[This Photo](#) by Unknown Author is licensed under [CC BY-SA](#)

ディーン・フィリップス：[This Photo](#) by Unknown Author is licensed under [CC BY-SA](#)

ロバート・ケネディ Jr.：[This Photo](#) by Unknown Author is licensed under [CC BY-SA](#)

コーネル・ウェスト：[This Photo](#) by Unknown Author is licensed under [CC BY-SA](#)

- 12 Stalwart 派：利権や猟官制に基づく組織票に恃む発想、Half-Breed 派：資格任用制を重視し、政治バトロネージュの点で Stalwart と対立。
- 13 大統領の任期は 2 期上限で、フランクリン・ルーズベルトが例外的に 4 期という話が半ば常識の様に語られるが、2 期上限が憲法に加えられたのは 1951 年である。それ以前は初代大統領ワシントンの 2 期勇退が慣例となったに過ぎず、フランクリン・ルーズベルトは前例に無視したに過ぎない。18 代大統領グラントや 26 代大統領セオドア・ルーズベルトも 3 期目を目指したが、何れも予備選敗退や党方針で断念した。第二次大戦に巻き込まれない為に、という大義名分で 3 期目、その後は大戦の遂行の為に、と大義を書き換えて 4 期目まで務めたフランクリン・ルーズベルトだったが、こうしたやり方への疑問から、2 期上限を法令化する動き、1951 年、これを定めた憲法修正第 22 条が成立する。ここでは、2 年以上大統領（職）を務めた者は 1 回以上大統領に選任されてはならない、とされている。リンドン・ジョンソンはケネディ暗殺後、1 年と 1 ヶ月しか大統領を務めておらず、1968 年の選挙で選任される権利があった。憲法修正第 22 条の該当条項原文は以下。
「Section 1. No person shall be elected to the office of the President more than twice, and no person who has held the office of President, or acted as President, for more than two years of a term to which some other person was elected President shall be elected to the office of the President more than once. But this Article shall not apply to any person holding the office of President when this Article was proposed by the Congress, and shall not prevent any person who may be holding the office of President, or acting as President, during the term within which this Article becomes operative from holding the office of President or acting as President during the remainder of such term.」
- 14 「米国大統領選：民主党指名争い」, 上原聡, 丸紅ワシントン報告, January 31st, 2020. https://www.marubeni.com/jp/research/report/data/MWR2020_03_DEMOCRATIC-PRIMARIES_20200227.pdf#search=%22%E4%B8%8A%E5%8E%9F%E8%81%A1%22
- 15 “Dean Phillips' Issue Positions (Political Courage Test)”, VoteSmart. <https://justfacts.votesmart.org/candidate/political-courage-test/181357/dean-phillips>
- 16 “55 Things You Need to Know About Dean Phillips”, Ian Ward, Politico, October 27th, 2023. <https://www.politico.com/news/magazine/2023/10/27/55-things-to-know-dean-phillips-00123600> 該当箇所「He also pitched his business acumen as a major selling point for voters: “I’d like to bring some of the business principles, the fiscal responsibility that I appreciate in the Republican Party, to Democrats,” he said.」
- 17 “55 Things You Need to Know About Dean Phillips”, Ian Ward, Politico, October 27th, 2023. <https://www.politico.com/news/magazine/2023/10/27/55-things-to-know-dean-phillips-00123600> “Billionaire megadonor Bill Ackman says Biden should step aside”, Miranda Nazzaro, The Hill, November 29th, 2023. <https://thehill.com/homenews/campaign/4333789-bill-ackman-says-biden-2024/>
- 18 “Sen. Joe Manchin says he 'absolutely' would consider a presidential run”, Rebecca Shabad, NBC News, November 15th, 2023. <https://www.nbcnews.com/politics/2024-election/sen-joe-manchin-says-absolutely-consider-presidential-run-rcna125368>

- ¹⁹ <https://www.nolabels.org/>
- ²⁰ 共和党：トランプ、民主党：バイデンという何れも不人気な候補に対抗して。
- ²¹ “Joe Manchin and Jon Huntsman flirt with third-party 2024 ticket in New Hampshire”, Vaughn Hillyard, Katherine Koretski and Dan Gallo, NBC News, July 17th, 2023.
<https://www.nbcnews.com/politics/2024-election/joe-manchin-jon-huntsman-flirt-third-party-2024-ticket-new-hampshire-rcna94377>
- ²² アラスカ、アリゾナ、アーカンソー、コロラド、フロリダ、ハワイ、ミシシッピ、ネヴァダ、ノースカロライナ、オレゴン、サウスダコタ、ユタの12州。
- ²³ “Manchin 2024 chatter puts spotlight on No Labels”, Brett Samuels, The Hill, November 26th, 2023. https://thehill.com/homenews/4323744-manchin-2024-chatter-spotlight-no-labels/?email=becebe0cb3afb385a2bd417dcc483bec12b87822&emaila=416fa43d2e919a976bdb399d369c6844&emailb=0baf8df3523ecb6241cd908be7f8d6d2c6a2ba2feb6c5c1d8f9e6bd036566db4&utm_source=Sailthru&utm_medium=email&utm_campaign=11.26.23%20-%20JPJ%20-%20Manchin%202024%20no%20labels
- ²⁴ “Pelosi launches an all-out attack against No Labels”, Brittany Gibson and Shia Kapos, Politico, November 2nd, 2023. <https://www.politico.com/news/2023/11/02/pelosi-launches-attack-against-no-labels-00125043>
- ²⁵ 連邦レベルでの15週間以降の中絶禁止推進という発言をしたが、訂正。”RFK Jr. backs 15-week federal ban on abortion, then reverses himself”, David Cohen, Politico, August 13th, 2023.
<https://www.politico.com/news/2023/08/13/rfk-jr-backs-15-week-federal-ban-on-abortion-00111017>
- ²⁶ https://democrats.org/wp-content/uploads/2022/12/DNC_Letter.pdf